

【速報】

野田首相が政府と民主党内に TPP 議論指示

野田佳彦首相は 10 日午前、視察先で記者団に、環太平洋連携協定 (TPP) への交渉参加問題について、「早急に結論を得るのが従来の姿勢だ。政府・民主党内で議論を始めるように指示した」と明らかにしました。首相は、11 月にハワイで開かれるアジア太平洋経済協力会議 (APEC) 首脳会議で TPP 交渉参加を表明する意向で、交渉参加に向けて政府・民主党内の意見集約を図りたい考えです。

空間線量の測定を実施

堆肥に落ち葉を使わないで

群馬県 あがつま農協



8月1日に出された堆肥の管理(放射性セシウムを含む肥料・土壌改良資材・培土及び飼料の暫定許容値の設定について)に基づいて、群馬県あがつま農協では堆肥とその原料、圃場の空間線量を10月5日に測定しました。



あがつま農協の高原野菜産地(長野原町)では農民連食品分析センターに堆肥を送って放射

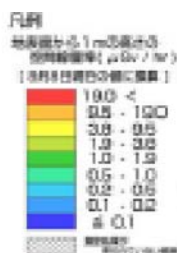
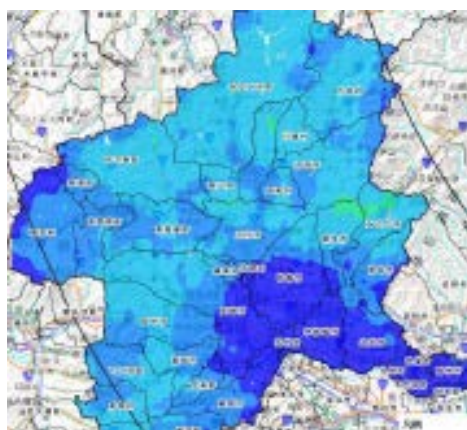
線の検査をしたところ、88ベクレル/kg、45ベクレル/kgなどの結果がでました。検出の生産者は牛糞、チップ、落ち葉、米ぬかなどを入れた有機本来のしっかりした堆肥を作っていました。

放射能に汚染された堆肥を圃場に持ち込めば、その分だけ圃場が汚染されてしまいます。このために堆肥の線量を高めている汚染された原料を特定することで、放射線量の低い堆肥が作れます。

あがつま農協では生産者の堆肥場を回って、堆肥や原料の落ち葉、牛糞、もみがら、落ち葉などの空間線量を高さ1メートル、5センチで測定しました。

今回は空間線量で傾向をつかみ、線量の高い枯れ葉などの原料、爆発ときに野積みされていた堆肥の表面、落ち葉の山の採取地の枯れ葉などの検体を作って、再度農民連食品分析センターに検査を依頼しました。

あがつま農協職員の浅見さんは「文科省の放射線土壌マップで町の西側は汚染が無いと思っていた。特に沢や森林が高い。今回の計測では堆肥に使う落ち葉が比較的高い傾向にあったので、堆肥の原料に使用しないように生産者に徹底したい。今回の生産者以外にも結果を伝えて、これ以上圃場が汚染されないように管理して、消費者に安心してもらえるようにしたい」と語っています。



ハウスの周り、雨どいの下の除染を



群馬県 利根農民の会(沼田市)

群馬県内で空間線量が比較的高い川場村、みどり市に近い沼田市にある「利根農民の会」では、部分的な土壌の検査、大根やトマトの放射線残留の検査を実施して出荷してきましたが、空間線量を測定して、地域全体がどんなレベルにあるかは調べていませんでした。

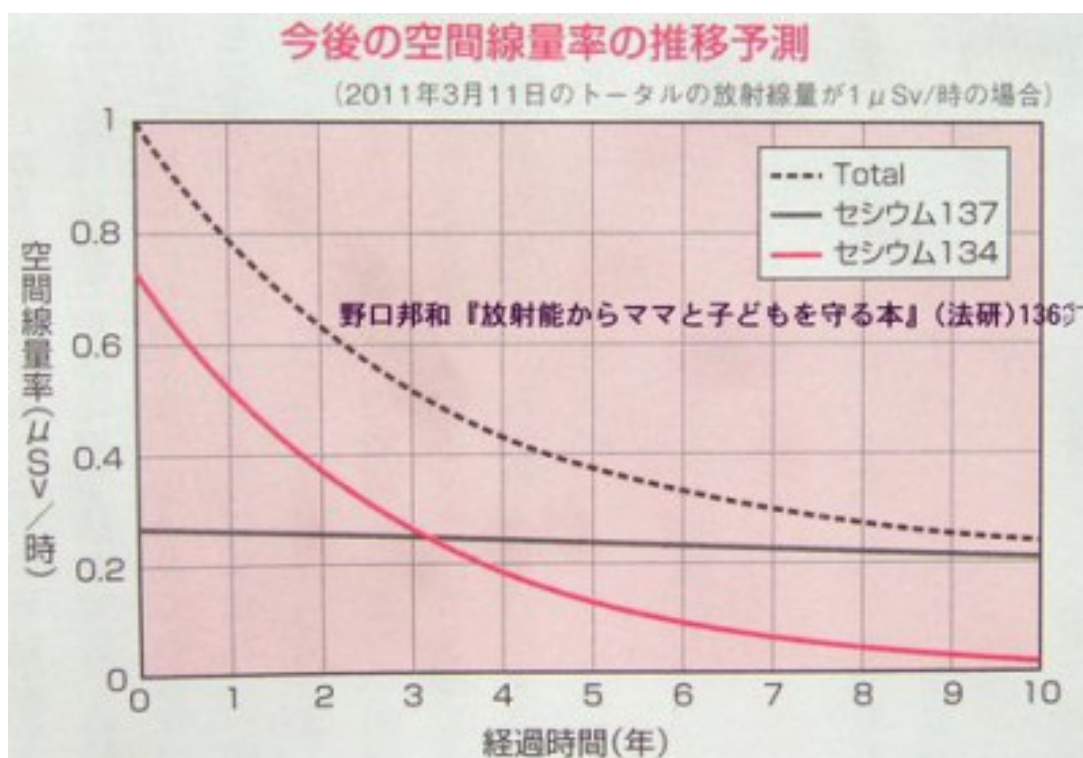
10月8日、近隣町村の空間線量を測定したところ1.5～2 $\mu\text{Sv}/\text{h}$ 程度あり、雨どいの下も1.5 $\mu\text{Sv}/\text{h}$ など、線量が比較的高いところもありました。

利根農民の会の生産者の圃場、堆肥場を回り、空間線量の測定をしました。圃場や堆肥場ではほとんど問題はないものの、ハウスの周りやシート、雨どいの下などでは0.5～0.4 $\mu\text{Sv}/\text{h}$ あり、収穫終了後には除染が必要な状態であることがわかりました。



利根農民の会の井上嘉輝事務局長は利根農民の会「今回の放射線被害の計り知れなさ、悲惨さから原発が安いなどとは到底言えない。自分も太陽光発電パネルを設置しているし、今後の電気自動車にも期待している。経営上どれも農家にとってプラスになることで大いに期待している」と語っていました。

**「3年で放射線量は半減します」
30年は誤解です**



野口邦和先生(日本大学放射線防護学専任講師)は、「放射能からママと子どもを守る本」(出版 法研)で、空間線量率の今後の推移について上図のグラフで説明しています。グラフの点線で大地の放射線量は3年後にほぼ半分に減り、6年後には3分の1、10年後には4分の1以下に減るといふものです。

グラフの横軸は事故後の経過時間で、縦軸を全空間線量率が $1 \mu\text{Sv}/\text{h}$ と仮定しています。福島第一原発事故から7ヶ月たった今、すでにヨウ素131は消滅しています。大地の放射線量はセシウムに起因しています。時間経過にともなって、相対的に半減期の短いセシウム134の放射線量は減少し、3年後にはセシウム137と逆転します(曲線と直線の交わり)。セシウム137の半減期は30年、セシウム134の半減期は2.065年です。空間線量率はセシウム137とセシウム134の合計を測定しているので、グラフにすると上のように3年後にはほぼ半分に減少するといふものです。セシウム137とセシウム134が量では1対1で大気中に放出されていて、私たちが分析結果を見る限りは大体同じ Bq/kg となっています。

一方、放射線量($\mu\text{Sv}/\text{h}$)をみると、事故直後のセシウム137とセシウム134が放つ大地の全放射線量の約27%がセシウム137、約73%がセシウム134ということで、セシウム137:セシウム134で線量の比率は、27:73といふのです。野口先生が指摘しているのは、セシウム137とセシウム134はそもそも放つ放射線量が違うということです。

チェルノブイリは高い放射線量が長く続いているという意見があります。チェルノブイリではセシウム137の量がセシウム134の2倍近く降ったので、なかなか減らないのです。

正確には、この2つの物質に起因する大地の放射線量は以下ようになります。これにより「30年たたないと半分に減らない」といふのは誤解と指摘しています。

1年後	0.79
2年後	0.63
3年後	0.52
4年後	0.44
5年後	0.38
6年後	0.33
10年後	0.24

「セシウム137の半減期は30年」という言葉が一人歩きして、「30年も経ってようやく半分しか減らないのか・・・」と落胆しがちですが、この5～6年間に外部線量と内部線量を限りなく低くする努力をすることで、未来は必ず開けるという提言です。この数値は、あくまでも放射性物質の物理的な半減期による減少の計算です。現実の状態では、雨や雪による洗浄効果、除染による減少などでもっと多くの放射性物質の減少も考えられます。

東都生協品質管理部の新谷部長は「ヨウ素131、セシウム134の半減期が短いというのは放射線をたくさん放って分解するので、被爆が心配です。ここ3年ぐらいは農家や原発に近いところで高い線量を一時的に強く受ける危険性があるので、被爆対策と除染をしっかりとしてほしい」と指摘しています。